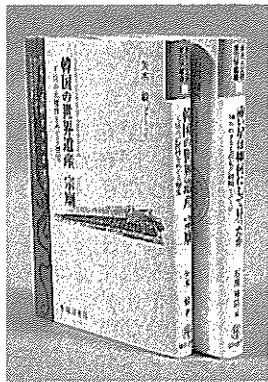


# 赤い星は如何にして昇ったか／韓国の世界遺産 宗廟

石川 禎浩 著／矢木 毅 著



■評者  
内田 孝  
(京都新聞  
総合研究所所長)

アを交えた平易な表現を通じ、中国近現代史に入門できるだろう。本書はメディア論でもある。潜在ルポの傑作「中国の赤い星」の著者で、半ば忘れられた米国人ジャーナリスト・スノーへの敬愛の念が執筆動機のひとつという。

北京五輪の準備状況の取材で2006年、京都新聞と交流のある「光明日報」を訪ねた。通訳を交えて何人かの記者と談笑した際、毛沢東を話題にした。和やかな雰囲気が一変し、誰もが沈黙した。死せる主席が記者を黙らせる。土産物で毛の似顔絵入り腕時計などが目立つ一方、建国のヒーロー

「韓国の世界遺産 宗廟(そうびょう)」は、日本人にはなじみの薄い儒教に基づく世界観を伝える。祖先からの歴史的な時間と、朝鮮半島―中国の地理的な空間、2本の軸を交差させて緻密に格付けた意識がこの国には流れる。なぜ日本の戦争責任が繰り返し浮上するのか。背景を知れば、何

## 東洋研究の世界に引き込む

の人物評は、まだ記者が軽々に語れる話題ではないことを悟った。

戦前からの中国学の伝統を自負する京都大人文科学研究所がこのほど「東方学叢(そう)書」の刊行を始めた。初回配本「赤い星は如何(いか)にして昇ったか」は、共産党の支配区域が人外魔境と思われていた1930年代、毛の人物像がロシアや日本でどう報じられたかを巡る謎解きだ。

冒頭、戦前の日本政府が「毛沢東」として1枚の写真が登場。まるまるした顔にひげを蓄え、ゆったりした雰囲気だ。読者は笑いとともに本書に引き込まれ、ユーモ

百年後も続く課題であり、開き直りでも謝罪一辺倒でもない外交を考える必要がある、と痛感する。

本書の前に岡本隆司「中国の論理」(中公新書)、檀上寛「天下と天朝の中国史」(岩波新書)に目を通せば理解しやすいだろう。前者は京都府立大教授、後者は京都女子大名誉教授による入門書。

来年は、京都が「東アジア文化都市2017」の会場。日中韓の文化芸術交流を目指すという。足元の東洋学研究者の成果を開催理念に加えれば、より深いつながりに結びつくと思うがどうだろう。

(臨川書店・各3240円)